

一

むかし神代かみよのころに、大國主命おおくにぬしのみことの幸魂さきみたま、奇魂くしみたまの神かみさまとして、この國くにへ渡わたつておいでになつた大物主命おおもぬしのみことは、後のちに大和國やまとのくにの三輪みわの山におまつられになりました。さて、その山を三輪山みやまといふについて、こゝういふお話はなしが伝つたわつています。

ある時とき大和國やまとのくにに、活玉依姫いくたまよりひめといふ大たいそう美うつくしいお姫ひめさまがありました。

この活玉依姫いくたまよりひめの所どころへ、ふとしたことから、毎晩まいばんのように、大たいそう氣高けだかいりっぱな若者わかものが、いつどこから来くるともなくたずねて来きました。そのうちに、とうとう若者わかものは、お姫ひめさまのお婿むこさんになりました。

間まもなくお姫ひめさまには子供こどもが生うまれそうになりました。ところで、そのお婿むこさんははじめから、夜よるおそく来きては、夜の明あけないうちに、いつ帰かえるともなく帰かえつてしまうので、お姫ひめさまのほかには、だれもその顔かおを見知りしたものもありませんし、どこのだれだといふことは、お姫ひめさますら知りませんでした。

二

お姫ひめさまのおとうさまとおかあさまは、ふしぎに思おもつて、どうかしてそのお婿むこさんの正体しようたいを見届みとどけたいと思おもいました。そこである日お姫ひめさまに向むかつて、

「今夜こんやお婿むこさんの来くる前まえに、部屋へやにいっばい赤土あかつちをまいてお置おき。それから麻糸あさいとを針はりにとおして置いて、お婿むこさんの帰かえるとき、そつと着物きものすそにさしてお置おき。」

といいつけました。

お姫ひめさまはその晩ばんいつけられたとおり、大きな麻糸あさいとの玉たまをお婿むこさんの着物きものすそに縫ぬいつけておきました。あくる朝あさ見みると、麻糸あさいとの先さきは針はりがついたまま戸との鍵穴かぎあなを抜ぬけて、外そとへ出ていました。そして麻糸あさいとが引ひかれるにつれて、糸巻いとまきはくるくるとほぐれて、もう部屋へやの中にはたった三みまわり、輪わになっただけしか、糸いとは残のこっていませんでした。

お婿むこさんが戸との鍵穴かぎあなから出て行ったことが、これで分かりましたから、お姫ひめさまはその糸いとをたぐりたぐり、どこまでもずんずん行ってみますと、糸いとはおしまいに三輪山みわやまのお社やしろの中に入はいって、そこで止とまっておりました。

それではじめてお婿むこさんが大物主命おおものぬしのみことでいらっしやったことが分かりました。そして糸いとが三輪みわあとに残のこっていたので、その山をも三輪山みわやまと呼よぶようになりました。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル